

台湾濁水河流域中継港〈西螺〉の成立・展開・変容 その1 漢人入植と商業街としての成立・発展

台湾濁水河流域	漢人入植	鹿港商人
西螺(雲林縣)	中継港	延平路

正会員	青井 哲人*	正会員	寺内 達也**	正会員	陳 穎嶺***
同	河野 紗輝**	同	保川 あづみ**	同	辻原 万規彦****
同	今 進太郎**	同	相川 敬介**	同	恩田 重直*****
同	○杉本 まり絵**	同	武田 峻哉**		

1 はじめに

筆者らの研究グループでは台湾西部平野の濁水河流域をひとつの構造をもつ世界と捉える視座から台湾都市集落史研究を再構築する研究プロジェクトを進めており、現時点では、植民地以前の伝統都市をA～Eの5種類に分類している(図1)。なかでも扇状部の複数の分流に立地する内陸河港都市(C群)は水害や漳泉分類械闘により移動・分裂を繰り返してきた。既報のとおり、東螺溪の中継港であった東螺街はその代表例で、19世紀初期にまず漳州勢が駆逐され、離散・帰農したが、のち沙仔崙の陳氏らは水害を機に都市再興を果たす(1901年頃の田中建街)。東螺に残った泉州勢は1806年の水害後、東螺溪の北岸に移って北斗を建街したが、やはり以後も水害は絶えなかった(文献1)。よく似た分裂は北港溪の笨港(北港)でも18世紀に起こっていた。

しかしながら、東螺溪・北港溪と同様の変遷が予想される西螺溪の西螺街については、管見では大規模な洪水や械闘の記録がみられず、C群では例外的にみえる。これは、他に比して水面と地盤面の高低差がやや大きいこ

と、また泉州系の鹿港商人が支配的な力を確立してきたことがその背景と考えられる。ゆえに、東螺溪・北港溪沿岸にみられる頻繁な移転による都市形態の洗練とは異なり、西螺では同一の場所での漸次的な都市変容が観察できると考えられる。以上が本報告の位置づけとなる。

西螺の都市形成に関しては、清代における鹿港商人の内陸中継港としての歴史的特質の解明があり(文献2)、本研究も主にこれに依拠するが、日本統治以後の空間的復原は本報告(1～4)でより詳細な把握を試みる。

2 西螺地域の歴史の変遷

2-1 清代の漢人入植と商業街の発展(17～18世紀)

「螺陽」(濁水溪は螺溪ともいう)と呼ばれた濁水溪扇状地では、17世紀のオランダ統治時代に少数の漢人入植がみられたが、平埔族のいわゆる番社「西螺社」の地域では清朝統治期に入り張士箱と鄭時敏により本格的な開発がはじまる(文献2)。18世紀初期、泉州出身の張士箱は鹿場圳をはじめとする灌漑用水路の建設を進め、鄭成功配下の系譜とみられる鄭時敏は屯田制により現在の西螺中心部の北東十町余(約1km)の様仔脚(正確な位置は不明)を開発した(文献3)。これが初期の集落となり、西螺溪流路に接する地形的制約から以後市街地は西へ伸びることとなる。実際、螺陽の農業基盤が整い穀倉地帯になると福建および広東系の移民が加速し、乾隆年間に鹿港商人の影響力の強い商業拠点として発展した。貿易港として栄えた鹿港と鹿耳門(台南)の中間に位置し、南北街道の渡河点でもあったため、西螺溪が主流となる乾隆末年から20世紀初には販仔間と呼ばれる宿泊施設も多数構えられたという。水害の都市への影響は決して皆無でないが、これについては後述する。

2-2 移転、拡大過程と都市構成要素(18世紀後期)

旧街と総称される市街は東西の大街である延平路を軸とし、東から街頭・街肚・街尾の三部に分かれる(図2)。街頭には暗街仔と、1937年の市区改正によって切り開かれた延平路最東部の市仔頭が含まれる。

初期集落は、嘉慶年間(1796-1820)の西螺溪氾濫で失われたが、これより先の1770年にはすでに都市中心廟の福興宮(媽祖廟)が街肚(現在地)へ移転してい

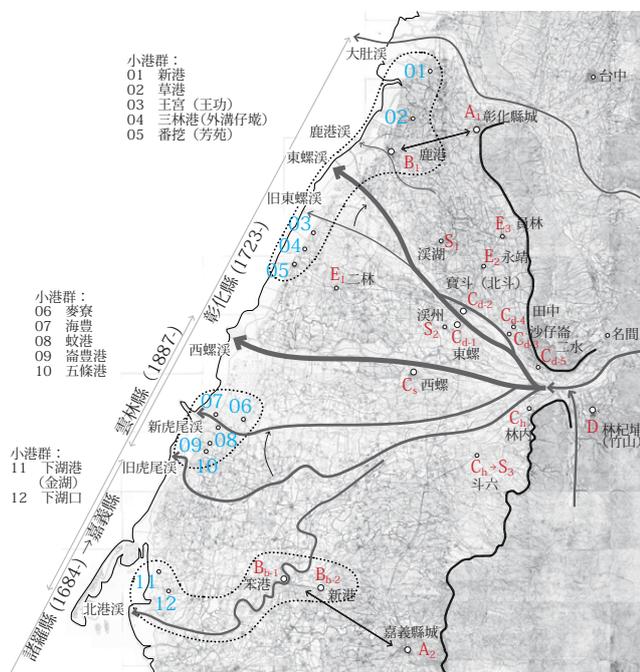


図1 濁水河流域に展開する都市群

A: 行政都市/扇縁 B: 対岸港市(沿岸河港)/扇縁 C: 中継港市(内陸河港)/扇縁 D: 谷口港市(産地物資集散地)/扇頂 E: 在郷街(農村物資集散地)
植民地期の都市類型は未検討だが、Sは製糖工場を核に形成された糖業都市を意味する。

Development of Sailê(Xiluo), a junction port in the Lôchúikhoe(Zuosuishi) River Fan, Taiwan, Part 1
Han Immigration and the Subsequent Development of the Merchant's Town

*Akihito AOI **Tatstuya TERAUCHI ***CHEN Yin-Chen
Saki KONO **Azumi YASUKAWA **Makihiko TSUJIHARA
Shintaro KON **Keisuke AIKAWA ***Shigenao ONDA
**Marie SUGIMOTO **Shunya TAKEDA

たことが示すように、市街地は延平路を伸ばして西へ成長していた。その後の街頭の市街地も、先端は現在の河川敷に達していたというが（文献3）、これものに失われたのであろう。こうした西遷パターンは、市街地が載る自然堤防が東から侵食される地形的条件に規定された西螺の歴史的特質であるといえよう。周辺集落が浸水被害に遭うたび、自然堤防の砂丘状に人々が移動する傾向があったことも重要である。

清朝時代の西螺には街門が6基設けられていたといい、街路に沿う複数の街が接続する構造であったとみられる。また、清末には都市軸に沿う旧街に加え、新街、仁和街、成美街などの周辺部も形成された（文献2）。

2-3 鹿港の商人団体と商店立地（19世紀以降）

19世紀には鹿港商人の金慶豊が雑貨を、台北府城商人の金萬福が食品・布・餅等を、それぞれ主に扱う商人団体をつくっている。清末には魚市も設立され、西螺には100以上の商店が立ち並び、西螺溪の中継港かつ周辺農村の集散市場として大いに繁栄した（文献2）。

西螺の産業にはまた農産加工業、とくに精米業が重要であり、昭和初期まで10数軒の精米業者があったという。なお、日本統治期終盤、延平路に面する呉服商13軒中北側に11軒、南側にはわずか2軒であった。これ

は主に乾季に北東季節風により巻き上がった粉塵が北面した建物には吹き込むため、特に高価な商品を取り扱う店は立地に偏りがあったともいわれる（文献3）。聞き取りから、多くの地主層は北側におり、金銭的余裕が出来た南側の住民が北側に転居した例も確認された。

3 むすびに

漢人入植以降の西螺の歴史的特質は、(1) 主要貿易港や街道の中継的立地、(2) 西螺溪流路に接する自然堤防上の位置、(3) これに規定された市街地の西遷パターンに見いだせる。これを踏まえ、次稿では日本植民地期の都市拡張と市区改正事業による変化をみていく。

参考文献

- 1 青木寛子・吉野歩・倉石雄太・野口努他「台湾彰化縣北斗鎮市街地における竹造町屋と都市変遷過程に関する研究1～4」（日本建築学会大会学術講演梗概集2013, 9234～9237）、青井哲人・笠巻優也・佐藤あやな・倉石雄太他「台湾濁水溪河系における都市形成の特質と田中市街の建設・変容その1～4」（同2014, 9083～9086）
- 2 楊朝傑「清代臺灣西螺街的形成與發展」（歴史臺灣 國立臺灣歴史博物館館刊 第九期、2015）
- 3 富田芳郎「西螺探訪記」（『民俗臺灣：複製版』4巻8期、1944、湘南堂書店）

*本稿は科学研究費補助金基盤研究(B)「台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から」（代表：青井哲人、平成27年～31年度）の成果の一部である。

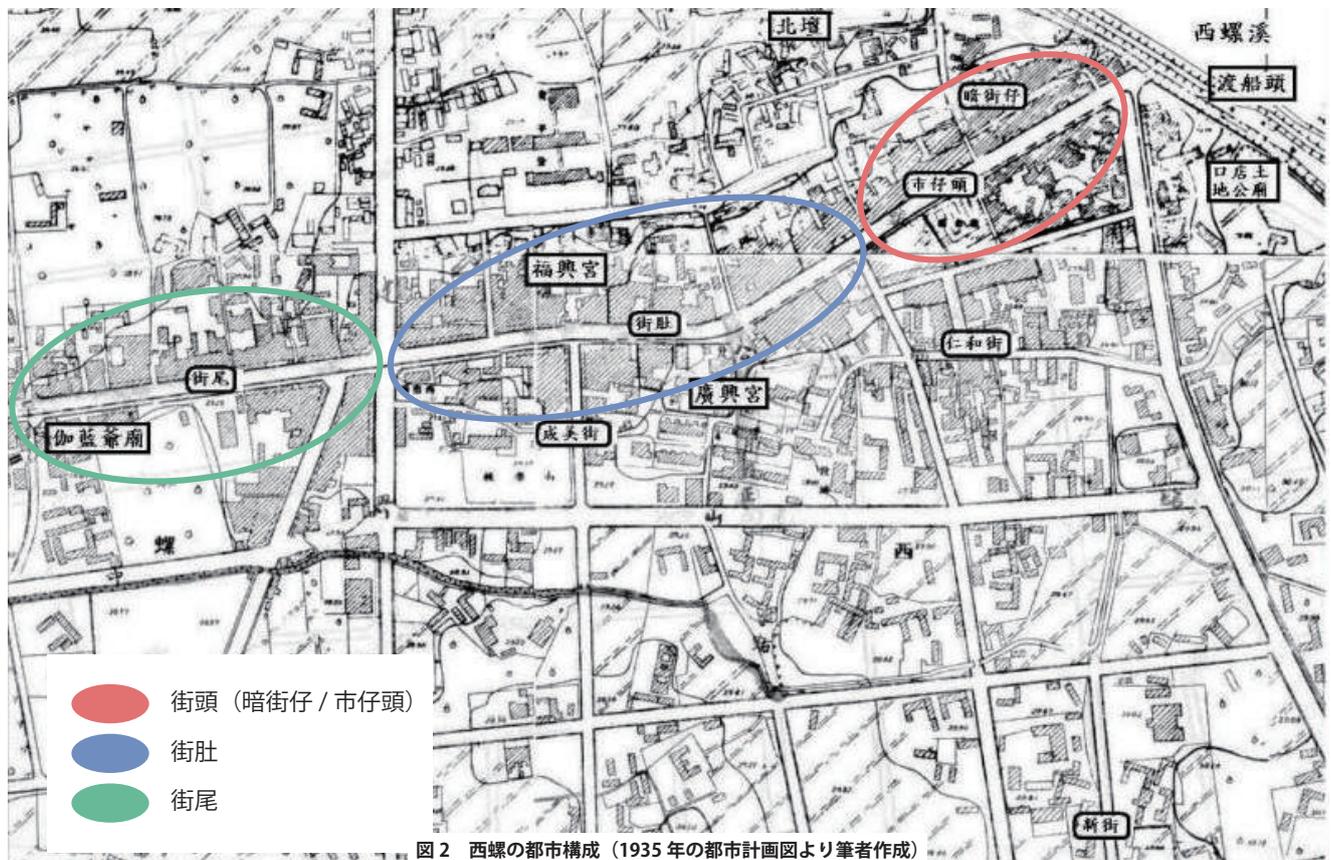


図2 西螺の都市構成（1935年の都市計画図より筆者作成）

* 明治大学工学部建築学科 教授・博（工）
 ** 同大学大学院理工学研究科 博士前期課程
 *** 博（工）
 **** 熊本県立大学環境共生学部居住環境学科 教授・博（工）
 ***** 法政大学エコ地域デザイン研究所 研究員・博（工）

*Professor, School of Science & Technology, Meiji University, Dr Eng. / **Master's Course, Graduate School of Science & Technology, Meiji University / ***Dr Eng. / ****Professor, Faculty of Environmental & Symbiotic Sciences, Prefectural University of Kumamoto, Dr Eng. / ***** Researcher, Laboratory of Regional Design with Ecology, Hosei University, Dr Eng.